

脱皮の数を数えよう

「子どもに寄り添う保育」では、どのようなことを重視していますか？この実践では、子どもの好奇心に注目して寄り添い、理解を深めることにより、保育の工夫を図っています。好奇心を揺さぶられている子どもには、自ら虫への興味を深めて観察し、気づいたことを言葉や全身で表現する姿が見られます。

好奇心に突き動かされ、関わりを重ねることで生じる不思議や疑問を解消するために、子どもは新たな発想をして、体験を深めていきます。保育者は、子どもの行動を支えるとともに、これらの姿を可視化し、子どもと共有できるような援助をしています。


石垣市立いのだ幼稚園

4・5歳児


場面1.「チョウチョの遊園地みたいだ」

オオゴマダラ、カバマダラ、ツマベニチョウなどの様々なチョウを見つけて、「チョウチョの遊園地みたい」と、**感動を表現する姿**があった。また、その幼虫、サナギ、成虫を戸外で見つけ、観察や飼育活動をする子どもたちは気づいたことを伝え合ったり、日常の遊びの中で身体表現を楽しんだりしていた。**一人が、卵と言って体を丸くし、手足を折りたんで小さくなる表現をすると、次々に他の子どもが、両腕を体にピタリとつけて幼虫になり、床の上をクネクネ移動したり、じっとして動かずサナギになったり、チョウが羽ばたく動作をするなどの表現をしていた。**また、「今まで見てきたことを、お家の人に教えたい！」と、“虫新聞”(P.9 参照)を書いて、**感動したことや分かったことを共有する楽しさを味わった。**

トウワタの葉を全部食べて、もう葉がない。トウワタを探しに行こう。



ねえ、この子は葉っぱの真ん中が好きみたい。



顔見て！へびみたい！




体はザラザラしているよ。



（羽化して羽を乾かし、飛び立つチョウたちを見て）**チョウチョの遊園地みたいだ。**




サナギの色って、薄ピンクや白っぽい緑とか、いろいろある。でも、黒いのはチョウになれないね。




体の横はいろいろな色でオシャレだね。




葉っぱの真似っこして隠れるのが上手だね！



＜全身で表現＞



葉っぱの上に小さな卵



クネクネする幼虫



サナギ



(チョウになって)パタパタ



＜保育者の読み取り＞ 自然の中での観察や、飼育活動をする子どもたちは、卵から幼虫、サナギ、成虫までを興味深く観察し、気づきや発見に驚いている。また、個体による違いや変化を見つけて、不思議に思い考え合っている。自分が見たり聞いたりして感じたことを、言葉や体で表現することで、多様な体験へと展開した。

場面2.「生きるってそういうことだよ」

・園庭でバッタやチョウを捕まえていたある日、カマキリを捕まえた。いつもなら降園時には虫たちを逃がしていたが、今回は初めて捕まえたカマキリなので、「すぐには、放したくない」との思いが強い子どもたちの要望で飼うことになる。

「飼いが分からないから、図書室に行こう！」と、隣接する**小学校の図書室へ調べに行った。**

「動いているのしか、食べないって！」「動いているのって、アリとか？」「チョウやバッタも食べるみたい！」と、やりとりをして園に戻る。早速、Aさんがカマキリのケースにバッタを入れる。他の3人もその様子を見ていたが、何も言わない。バッタなどの虫が見つからず、セミを飼育箱に入れてみるが食べなかったので、動いていても食べない虫がいることを知る。

・ある朝、捕まえたバッタをカマキリに与えて、カマキリがバッタを食べるところをジッと見つめ、**「ちょっと、バッタさんもかわいそうかも」という子どもがいた。Aさんが、「カマキリも餌を食べないといけなから、仕方ないんだよ。人間だって魚やお肉食べるでしょ？生きるってそういうことだよ」と言う。**Aさんは、家でヤギを養っている生活の中で、生きるための食物連鎖を感じ取っている。

場面3. 「脱皮の数を数えよう！」

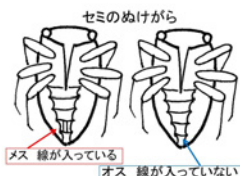
- ・ **カマキリのことを図書室で調べると、「5回程、脱皮をする」と、記述されていた。**この記事に子どもたちはすぐ反応し、飼っているカマキリの**脱皮の数を数え、脱皮した皮を集める**ことにした。6月12日に1回目、6月28日に2回目、7月13日に3回目の**脱皮を確認した**。その後、カマキリが死んでしまったので、3回しか脱皮を確認できなかったが、2週間前後の間隔で脱皮をすることが分かった。
- ・ **カマキリやチョウの成長過程の観察を通して、大きくなるために脱皮を繰り返す虫がいることに気づいた。この経験から、他の虫が脱皮した皮なども集めていった**（カバマダラ、オオゴマダラ、ツマベニチョウのサナギの殻、クモ、ヤゴ、セミ、バッタの脱皮）。



<保育者の読み取り> 動いている物しか食べないカマキリを飼いたいが、餌として与えたバッタを見て、「かわいそう」と感じる。家でヤギを養っているAさんは、カマキリの餌になる生き物と、自分たちも魚や肉を食べていることを比べ、自然の摂理を認識し、判断している。この話し合いにたくましさが見て取れる。脱皮という不思議に遭遇して、カマキリへの好奇心は脱皮や殻の追究につながった。

場面4. 「セミの殻にも雄雌ってあるの？」

- ・ 毎日、セミ取りや殻集めを楽しみ、羽化にも立ち会ったことで深まる**セミへの好奇心から、セミには雄雌があることを知ることとなった。生きているセミの雄雌が分かるようになる**と、今度は、「殻にも雄と雌があるの？」との探究心が湧いてきた。
- ・ 子どもたちは、本や図鑑を調べたが分からなかった。保育者が調べて、子どもが見て分かりやすいイラストの資料を提示し、**セミの殻でも雄雌が分かることをクラスで共有した**。雄雌の違いを理解し、すぐにセミの殻の腹の下を見て、「これは雌…これは雄…」と、取ってきた殻を分け始めた。
- ・ 毎日集めたセミの殻を数えていたところ、「**ただ数えるんじゃなくて、雄と雌に分けようよ!**」と、Mさんが提案する。そして、毎日集めては数え、殻の数が見て分かるように表にした。約4週間で、雄101個、雌が52個、合計153個が集まった。「最初より、少ししか取れなくなってきているね」「毎日、取っているからじゃない?」「でも月曜日は、土曜日と日曜日のお休みの時は誰もセミの殻を取らないから、たくさんあるよ」と、数量に関心をもち、前後の日で比べるようになった。雄雌に分けて数える作業を毎日繰り返すことで得た、セミを見分ける自信が有能感につながり、セミ博士になりきって、やりとりを楽しむ姿が見られるようになった。



場面5. セミの殻アート「ひまわり」

- ・ 「この殻で何か作りたいな」と、毎日集めていたセミの殻に愛着が湧き、集めた殻で、自分たちで何らかの形に残したいと考えるようになっていった。「セミは夏の虫だから、夏の何かにしよう」「じゃあ海は?」「ヒマワリがかわいいよ!」と、皆で相談し、ヒマワリ作りに決定! 「花びらはお腹を見せるように貼ろう!」「真ん中は背中を見せよう」「花の茎は幼稚園のヘチマで作ろう!」と話し合い、**殻の特徴を活かし、大切に扱いつつながら作品を作り上げた**。

[考察] 虫の卵、幼虫、サナギ、成虫を自然の中で見つけたり、成長過程を楽しみながら飼育して羽化に感動したりなど、多くの体験から高まった好奇心により観察力が磨かれ、細やかな言葉や身体での表現となって現れた。また、変態や脱皮など、観察したり調べたことを確かめたりする体験につながった。これらの**共通体験により、好奇心の対象の「虫」への愛着は深まり、「生死」や「虫や自分たちの食生活」について、友達同士で考え合う体験につながった**。さらにその後、連日集めた**多くのセミの殻を雄雌に見分けて数え合う活動や、次第に殻が少なくなっていることに気づいて考えを出し合い、話し合うという協働的な体験になった**。セミの殻でヒマワリを表現する活動からは、セミの殻一つ一つへの愛着だけでなく、好奇心が植物にも広がっていったことが分かった。